

第4回 県立高校教育振興検討会議 議事概要

1 日 時 令和5年12月22日(金) 14:30~16:35

2 場 所 富山県民会館 302号室

3 委員出席者 荒井 公浩 池永 美子 上田 良美 亀谷 卓朗
近藤 智久 品川 祐一郎 鈴木 真由美 高瀬 幸忠
田辺 恵子 鳥海 清司 中村 総一郎 松山 朋朗
水口 勝史 水口 芳美
アドバイザー 青木 栄一 南部 初世

4 会議の要旨

司会が開会を宣した。

5 教育長挨拶

(教育長)

本日、第4回の県立高校教育振興検討会議を開催いたしましたところ、皆様には年末の大変お忙しい中、また足元の悪い中、ご出席賜りましてありがとうございます。また、オンラインでご出席いただいております委員の方にも、ありがとうございます。

さて、この会議は第4回になりますが、今後10年あまりで、高校に入ってくる子どもたちが3割減になるという急速な少子化の中、社会の変化に対応した魅力ある高校をどう実現するかという観点で議論をいただいて参りました。

本日の検討会議ですが、「県立高校の再編に関する学校規模や基準等の素案について」「学科やコースの見直しについて」「様々なタイプの学校・学科等について」の3点について、ご検討いただきたいと考えております。

県立高校の再編や高校の魅力化ということは、富山の教育の非常に大きなテーマとなっており、富山の県政の非常に重要なテーマともなっております。先週の14日に閉会した富山県議会11月定例会においても、非常に多くの議論がなされました。また、今週19日には、高校再編をテーマとした県議会の政策討論委員会が開かれました。また、昨日は自民党富山県議会議員会で作られたプロジェクトチームである「富山県教育の未来を考えるPT」と富山県知事との意見交換も開かれたところです。政策討論会や昨日の概要は、参考として、委員の皆様へ情報提供させていただいているところです。

こうした議論の中で、高校再編というテーマの重要性を鑑みて、地域の声や意見を聞く場を設けてほしいといった声が多々ありました。そういったことから、教育委員会としても、これまでの検討会議の議論や検討の概要を県民の皆様にご説明して、ご意見をお聞きすることも必要と考え、そういった場を設定させていただくこととしました。

具体的には、1月22日に富山地区ということで県民会館の会場、1月24日には高岡地区ということで高岡文化ホールを会場にして、そうした会議を持つ予定としております。

本日の会議での議論と1月に皆さんからお伺いした意見も踏まえた上で、今後さらに検

討していきたいと考えています。委員の皆様には、ぜひ忌憚のないご意見を多数頂戴したいと思います。それでは、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

議事事項

- 県立高校の再編に関する学校規模や基準などの基本的な方針について
- 県立高校の学科やコースの見直しについて
- 様々なタイプの学校・学科等について

事務局から資料に基づき、本会議における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

(会長)

皆様から幅広い観点でいろいろなご意見を伺い、第5回検討会議において、それぞれの検討項目について、これまでの皆様のご意見を踏まえた基本的な方針の案をお示ししたいと思っていますのでよろしくお願いいたします。

資料2の1ページにあるように、県立高校の目指す姿について素案を作成しました。この素案について、ご意見を伺いたいと存じます。

(委員)

前回、ビジョンについて発言をさせていただいたのですが、再編について構想されていく中で、ここにはこだわる必要があるのではないかと思います。これから様々な方からのご意見が出てくると思いますが、今まで経験がないくらい子どもの数が圧倒的に減っていく中で、再編について議論していくので、しっかりしたビジョンを最初に作っておかなければ、なかなかまとまってこないのではないかと思います。今回の資料では、その内容が明確に網羅されてきたのではないかと思いますので、私としては、いい方向になってきたのではないかと受け止めています。

示されているビジョンの中に、子どもを中心とした視点に立つということが明確に謳われており、学びの質の向上や生徒の幅広い選択肢の確保、社会のニーズを踏まえた教育体制の整備の3点にまで具体的に落とし込まれているので、非常にわかりやすくなったと思います。こうした方針の中で、様々な現象や対策について議論できるものだと思います。

(委員)

以前からの発言のとおり、やはり小規模校には小規模校の良さがあり、大規模校には大規模校の良さがあると思っています。これが選択肢になっていけばいいのではないのでしょうか。人口減少が進む中においては、規模感だけで追うと、どうしても学校再編のスピードばかりが目されるのではないかと思います。生徒が安全・安心に通える環境を確保しながらの再編が望ましいと考えます。

(委員)

示された素案は、子どもたちの学びが第一に据えられ、それが明確に考慮されています。

こうしたことを前提とし、その先にどういう学校や学科の配置をするか、そこで展開される教育内容がどうあるべきかということを練っていくことが大切だと考えます。

「再編検討の方向性」に示されている2点について、一体的に検討していくことが示されているのは、これからの時代に合った形になるよう検討を深めていこうとする表れだと思うので、示された案には、これまで議論を重ねてきたことが網羅されていると思っています。

学科構成については、中高一貫教育校や外国人生徒に係る特別枠などのことが挙げられていますが、県内に数校ある総合学科設置校といった形態も視野に入れながら、小規模校、中規模校、大規模校での役割がどうあるべきかということとあわせて、様々なタイプの学校についても検討を深められるといいのではと感じています。

(委員)

資料2の1ページに、これから育てていく人材のビジョンが示されていますが、私もとても大事だと思っています。そうした観点からすると、学校の規模について、2ページの下にあるように、1学年4学級以下または160人以下の規模の学校ということで、間口を広げるという方向でよいのではという感じがします。ただ、規模は必要なのでしょうが、それは2番目に大事なことであり、子どもを中心とした視点に立てば、それぞれの地区に進学を重点とする学校、総合選択を目指す学校、職業科の学校、そしてできれば、せつかくの機会なので、今までの考え方の延長線上にない新しい取組みを入れた学校など、各地区において子どもたちの選択肢が広がるようにし、いずれの学校でも示されたビジョンを目指していける再編が望ましいと思います。

その際には、「目指す姿」に記載されている「学びの質」や「社会のニーズ」とは何かといった魅力と活力ある学校づくりの定義について、先生方や保護者が共有し、進学実績や偏差値の上昇ではなく、学びの質の変化を追い求めていくことが大事ではないかと思いません。規模に拘泥する必要はなく、子どもたちが選びやすいように魅力を高めていくことが大事だと考えます。

また、子どもを中心とした視点ということであれば、もちろん第一ではありませんが、志願者数は、子どもの意思表示ですので、志願者数の少ない学校を存置することも必要な場合がありますが、たくさん子どもたちが手を挙げるような、望まれる学校づくりが必要だと考えます。

(委員)

私も再編検討の方向性については、1学年4学級以下または160人以下という基準がよいのではと思っています。当然、小規模、中規模、大規模の学校が偏らず、子どもたちが通いやすいようになればよいと思っています。子どもを中心とした視点で、あるべき高校が配置されることがよいと思っています。

(委員)

社会のニーズが産業界のニーズと一致するかどうかは別として、産業界としてもグローバルな環境下にある昨今においては、独力で考える力を育んだ上で、社会に出ていただき

たいと思います。子どもたちが幅広い選択肢の中から、いくつかの過程を経て、社会に出てくることを考えると、教育の体制を思い切って変革していくことも大切ではないかと思っています。

私たちは、コロナ禍を経験したわけですが、その中で、子どもたちも教師の方々もオンラインの授業などを併設しながら、たくましくやり抜いてこられたわけです。そういったことも今回の再編を検討するにあたり、非常に重要な要素となるのではないかと思います。物理的な統合ばかりを意識するのではなく、論理的というかバーチャルな統合なども検討していくべきだと思います。コロナ禍で得た知見をもとに、そういった教育体制を議論すべきではないかと思っています。

(委員)

とても少子化が進んでいるため、高校再編はどうしても必要だと思いますが、地域における子どもたちの教育環境をしっかりと確保していただき、子どもたちが本当に自分たちのやりたいことができる学校に行けるようにしていただきたいと思っています。

再編についても、幅広い基準を設けていただき、子どもたちが選んでよかったと思える学校ができる再編になればよいと思います。

(委員)

「目指す姿」にあるように、生徒の幅広い選択肢を確保した上で、学びの質を向上させるためには、1校当たりの教員数と生徒数を確保することが重要ではないかと考えます。今後の生徒数が劇的に減少していきませんが、国が示している1学級当たりの生徒数や、それに対する教員の配置数に関する規則や制度が変わらない状態で、県が独自に何らかの規則や制度を設けるといことがないのであれば、現状の学校数を維持するためには1校当たりの生徒数が減少してしまい、配置される教員数も減少することになってしまいます。そうすると、生徒の幅広い選択肢の確保や学びの質を向上させるということに困難が生じることは、十分に予想されます。

現在の再編方針の方向性については、現行の規則や制度において、生徒の幅広い選択肢を確保した上で、学びの質の向上を図ることを目指したものだと思うので、この方針を基本に考えることは良いことで、示された素案もその方向性に従っているのではないかと思います。

素案の「ただし」以下についてですが、この部分がある意味重要なところで、例えば中等教育学校や、義務教育学校と高等学校を一つにしたような形態の学校を設置することや県立高校の設置者に関して工夫をすることなど、改革の余地を残すためにも「ただし」以下の文章が必要なのではないかと考えています。

特別な事情として、職業科単独校が括弧の中に加えられていますが、これを残してしまうと、職業科単独校だけが聖域化のようになってしまうので、これは外してもよいのではないかと思います。

全体としてはこの方向性でよいと思いますが、最後の1点については、一度考えてみるのがよいのではないのでしょうか。

(会長)

それでは、学科やコースの見直しについて、意見交換に移ります。

資料3の関係する校長先生方からのご意見も参考に、普通系学科や商業科、家庭科の見直しについてご意見をいただきます。また、各学科の配置や定員設定等についてのご意見もお願いします。

(委員)

校長先生方が仰るとおり社会で要求されるデータサイエンス系については、配置されていくべきですし、強化されていくべきものであると思います。

職業系の学科は、欠員ばかりがクローズアップされることが多いような気がしますが、そうではなく、例えば家庭科の場合は、関連分野に大変たくさん割合で進んでいることに鑑みると、職業系の学科は、関連分野に進んでいくことを特に意識していただき、子どもたちにとって魅力ある学科にしていく努力をもっとすべきと思います。単なる高校生活を送るためだけの入学ということにならないように、「子どもたちのため」を第一の視点に据えて、カリキュラム等の見直しなども必要ではないかと思います。

また、例えば家庭科では、それぞれの学校が県西部、中央部、東部とバランスよく配置されていることから、通学時間の観点などを考慮するとこのまま残すべきだと思います。ただし、それぞれの学校で、特徴を持った学科となることが重要であり、西部に入学した生徒がオンラインで東部の学校の授業を履修できるなど、バーチャルにこれらの学校が統合されている状態ができると、もっと魅力ある学科になるのではないかと思います。

その過程においては、ICTの分野は大変重要であり、現在、海外ではICTという産業分類がない状態で、当たり前のこととして認識されているので、どのような学科であっても、ICTやデータサイエンスといったものを履修できるような環境を作っていくべきだと思います。

(委員)

前回も同じようなデータを示していただきましたが、そのデータを見ると、職業科の中には進学者が7割や8割となっているところが結構あります。このような状況に鑑みると、普通科の中のコースとして特色ある教育内容を残していくのも一つの方策ではないかと考えられます。また、校長先生からの意見にもそのような意見が結構あったのではないかと思います。

商業科出身の大学生から、「簿記などはできるが数学ができなくて困っている」といった話を聞いたことがあります。基礎的な学力を身に付けながらも、専門的なことも少しやるという形でコースを作っていくのも一つではないかと考えます。

一方で、高校生のうちに技術を身に付けて、その技術を生かして即戦力となる人材を養成している職業科もあります。そういったところに関しては、技術等の習得に先鋭化した学科として存続させていくことも必要ではないかと考えます。

(委員)

職業科を選ぶ志願者が減っていることについては、その職業科でどういう力が身に付く

のか入学してみなければわからず、そうしたことが子どもたちにとっては不安なため、最初から選ぶことができないという生徒が増えてきていることに起因していると思っています。先輩が職業科に進んでいけば、具体的なことを聞いて情報を得ることはできますが、一度のオープンハイスクールだけでは掴みきれないものがあるため、子どもたちは15歳で決断することはなかなか難しく、3年間普通科で勉強して自分の道を決めたいと思う生徒がいるのが現状だと思います。

県全体の学科配置を考えると、先ほどから言われているように、子どもたちが自分の好きなところで学び、そこで力を伸ばすことができるように多様な学科がバランスよく配置されることが、生徒にとっては大変いいと感じています。

(委員)

私の勤務地はものづくりが大変盛んで、たくさんの工場等があります。話を聞いていると、職業科の生徒が減ってきたこともあり、現場では即戦力を切望する状況にあることを実感しています。

また、データサイエンスやそういった分野の重要性については、私も十分に認識していますが、中学生が理系、文系と進路を選択するのは大変難しいと思います。これからそれぞれの高校の特色がどんどん出てくるとは思いますが、中学校段階から方向性を持ちながら進路選択をしていくことは大切なので、どういう学科やコースなのかといった特色を中学生にしっかり伝えていただきながら、間違いのない選択につなげていくことが大切だと思います。

(委員)

普通科の魅力化を図るといった観点からは、私も普通科のコース設置について検討する必要があるのではないかと思います。その際、資料3の2ページにありますが、最近の流行や現代社会のニーズに鑑みると、データサイエンスコースやグローバルコースは、まさに生徒が学びたいと思えるもので、卒業後の進学先や実社会で生かせるようなコースではないかと思っています。今ほどの委員からもありましたが、設置においては、コースの特色をしっかりと考えて明確にし、様々にPRしていくことも大事になると思います。

また、家庭科と商業科の話がありましたが、現在の職業科を普通科コースに変更することが可能なのかという点においては、例えば「普通教育を主とする教育」の中に職業科の専門的な学びを導入し、魅力化と特色化につなげることができるのかということも考えていく必要があるのではないかと思います。

いずれにしても、関係高校とのヒアリングや協議を丁寧に行うことが必要だと思うので、そういったことを行いながら、県立高校の学科やコースの魅力化を図る見直しは大事になると思います。

(委員)

先ほどからの意見や校長先生方からの意見の中にもありますが、魅力を発信することは子どもたちが選択することにつながります。職業科の中には、市と連携してSDGsに関連するプロジェクト学習を行ったり、商業科において二つの学科が連携してイベントに参

加したりする例があり、高校生たちは地域や企業、大学などいろいろと外に出ている実態があります。こうした取組みは、中学生やその保護者の方にとって、高校生がどのような学びをしているか、どのような活動をしているかが直にわかる良い機会だと思います。

先ほどオープンハイスクール1回限りでは、なかなかわからないというご意見がありました。確かにそうだと思います。SNSで発信しても字面だけではわかりません。市町村や企業、様々な団体と高校が連携することで、高校生の活動に直に触れることができる取組みがあるとよいのではと思います。各市町村ではいろいろなイベントがあり、各地区にはいろいろな高校があるので、うまく連携することができれば、魅力発信ができ、それが定着すると子どもたちや地域、保護者の方に学校の魅力が伝わっていくのではないかと思います。

今年、高岡市内にある県立高校の学校祭におけるテーマ研究発表で、希望する中学生とその保護者の方を受け入れる試みがなされましたが、学んでいることや生徒同士が意見を交わしている場面を見て、高校生の様子を実感できたのではないかと思います。

これからの子どもたちがしっかりと進路選択して育ってほしいと思っているので、いろいろな方法で高校の魅力発信ができればよいと思います。

(委員)

皆様のご意見をお聞きしていましたが、成果を出すことを早く求めていらっしゃるよう感じました。もう少し、生徒にゆっくりと考える時間を与えることはできないかと感じています。

昔の話ですが、専門学校では時間に少し余裕を持つことができた時期があったと思います。そういった一つとして見るものではないかもしれませんが、今の子どもたちは、早急に決められた時間の中で進路を考え、選択し、将来を見据えて計画しているように感じました。

(委員)

振り返ってみると、息子が中学校から高校に進学する際、やりたいことが定まっていなかったのも、「とりあえず普通科に」と言った覚えがあります。そして高校から次に進学する際も、やりたいことがまだ定まっておらず、「とりあえず大学に」といった繰り返しになっています。そうしたことから、普通科ではいろいろな学びの機会を与え、将来を見据えた様々な学問ができればよいと思います。

私は、総合的な探究の時間の地域の課題解決に関するプロジェクト学習に関わっていますが、子どもたちが様々なテーマを自身で見つけ解決したいという思いが、学習を経るごとに深くなっているのを見ると、彼らの将来がとても楽しみになります。子どもたちが目を輝かせ、学びに取り組む姿を見ていると、普通科でもいろいろな学びに対応できるような形があればと思います。

一方で、いろいろな学びに対応していくには、教員数や多様な分野に対応できる教員が必要になるので、大変な課題となります。このようなことも具体的に考えていく必要があると思います。

(委員)

普通科のお話があったので、普通科コースや職業科に関して発言します。

校長先生方からの聞き取りや、いろいろな高校のホームページを拝見させていただきましたが、学科でどのようなことをしているのかという特徴をよく発信されており、それについては、おそらく生徒たちに届いているだろうと思っています。

一方で、それを学ぶと自分が将来どういう道を開けるかや、それを学んだことによって自分にどのような力が付き、どういった方向に伸びていくのか。赤裸々な言い方ですが、この高校に行くと進学するにはどういったメリットがあるのかや、どういった就職ができるのかというロールモデルや将来を開くためのビジョンが持てるような情報発信がもう少しあると、多様な学びの可能性を生徒に届けることができるのではないかと感じています。

また、先ほどの委員からもありましたが、そういったいろいろな学びを可能とするには、用意する側の負担が大きくなります。教員数を増やすことも重要だと思いますが、コロナ禍によって、オンラインの講義や、ICTやDXといったデジタルを使った技術が非常に発達してきたので、そういったこともうまく使っていただき、例えば県西部と東部の生徒が両方同じ授業を受けたり、連携によりグループディスカッションをして、何かを作り上げたりといったプログラムができるのではないかと思います。

(会長)

それでは、様々なタイプの学校・学科等について意見交換に移ります。

今回のテーマは、中高一貫教育校の設置や外国人生徒に関わる特別定員枠について、ご意見をいただければと思います。

(委員)

先ほどの議題にもありましたが、普通科でも職業科でも、同じようなサービスを提供する学校が同じ地区内にいくつもあり、専ら偏差値のようなもので輪切りになっている状況に、子どもが窮屈を感じているのではないかと思います。

資料にあるような中高一貫教育で特色を持たせるような部分は、あってもいいのではないかと思います。また、外国人生徒にかかる特別定員枠もあってもいいのではないかと思います。先生は大変かもしれませんが、従来の延長線上でないこのようなサービスにチャレンジする価値はあるのではないかと思います。

また、様々なタイプの学校について、先ほど申し上げた進学重点校や普通科と総合学科、または普通科と職業科が合わさった総合選択制の学校、職業関連校を配置していくことを考えると、その中に今まで富山県の公立高校ではなかったようなタイプの学校が、各地区で一つずつくらいあったらいいのではないかと感じます。一人一人がワクワクするような学校、または社会と接点があるような学校があればいいのではないかと思います。

ある書籍によれば、大阪府立箕面高校では、校長が変わって3年目の時に、36人が海外の大学に進学したようで、ボストンに2週間留学したり、1人3万円ずつの会費で留学生を10名程度呼んで国内キャンプをしたりしているとのことでした。

このような公立高校や、県内でも取り組んでいる例もありますが、主権者教育や金融教育、社会課題の解決、デザイン思考を伝えるような教育など、普通科において教科の勉強

ばかりするのではなく、そのようなユニークなことに取り組む公立高校があれば、行ってみようかと思うのではないのでしょうか。

投資や政治のことを学校でタブーにする時代ではなくなっていると思うので、そうした選択肢がどこかの地区の公立高校にあれば、自分の子どもに組み合わせてもいいかなと思います。

中高一貫教育校や外国人生徒特別枠、先進モデル校などについては、私たち大人が考えるより、子どもファーストの視点ということであれば、現在の高校生にどのような学校を求めているのか、または大学1年生に本当はどのような学校だったらワクワクしたか、どのような学校があればもっとよかったかといったことを聞いてみるのがよいと思います。

また1月にある説明会においても、特に学校のタイプについては、校長先生や私たちだけではなく、子どもたちが集まり意見を述べる場があってもいいのではないかと思います。

(委員)

中高一貫教育校については、東京の方からの話では、都会にはこのような学校がかなりあるようで、それなりのメリットはあるようです。しかし、それに関して、富山県については少し事情が違うのではないかとというのが率直な考えです。ただし、一度検討する価値は十分にあると思います。それは、これからの子どもたちの選択肢を広げさせる方針の中では、非常に得策だと思うからです。

私が住んでいる地域では、小学校、中学校、高校が非常に充実しており、子どもがたくさんいます。これから統廃合があることや、子どもの数が今より30%減っていくことを考えるのであれば、この地区であれば、中高一貫教育校を作ることは可能ではないかという思いがあります。それが可能ということであれば、10年後に向けて、子どもたちが行きたくなるような学校を作ることについて、ポジティブに考えられると思いました。そのような考え方をしていくことは望ましいのではないかと思います。

また、外国人生徒について産業界を代表して申し上げますが、外国から優秀な研究者や技術者を呼ぶ場合、大抵、その方は奥さんや家族を連れてきます。その家族を富山県が受け入れようと思ったら、やはり教育が重要になります。富山県が教育に対して懐の深い県であるなら、そうした生徒を受け入れる対策を施すことが非常に大切だと思います。人口が増えるということや、外国人の気質としてお世話になった県に必ず恩返ししようとすることから、その子どもはその県で就職をして、自分で税金を払っていきなりとなります。従って、そういった教育を可能とすることは大事なのではないかと思います。

先ほどから、日本語を世話する教員がいないといった問題が現実にあるとのことを伺いました。そうであるならば、県内大学の教育学部の学生などをこういう場に呼び、外国人教育についての実習とすることや、今の時代に合わせた教育について検証して進める考え方をこの機会に広げることが、非常に有効ではないかと考えました。外国人生徒特別枠については、「全国でどこよりも富山県はそういうことに強いので、ぜひ来てください。」と呼びかけられるようになりたいということを申し上げます。

(委員)

高岡でも、仕事のために外国人がたくさん来られますが、そのお子さんたちは言葉があまりよくわからない状態で、小学校や中学校に入っていました。その子どもたちは、非常に思いやりがあり、日本の子どもと互いに思いやりを持って過ごしていたように思います。

14歳の挑戦で、中学2年生の子どもたちを受け入れた際、朝の決まった時間まで来ていなければ学校へ連絡しなければならないことになっていたのですが、外国籍生徒の中には、生活習慣が違うため、時間を守ることがなかなか難しい子たちもいました。私の方で、来ていないことを学校へ連絡しようとする、「もうすぐ来るから、少し待ってほしい。」とすごく思いやる生徒がいました。それを見て私は、大人でも子どもでも、外国の子どもでも日本の子どもでも、人に対する思いは同じだと感じ、非常に嬉しく思った経験があります。そうしたことから、外国の子どもたちが来ることは、とても喜ばしいことなのではないかと考えました。

(委員)

特に呉西地区には多くの外国籍生徒がいると聞いていますが、現在、中学3年生の外国籍の子どもたちが進学できる高校はありません。日本に来てからの期間が短いと、当然、日本語力は付いておらず、学力も身に付いていないので、なかなか厳しいというのが現状です。ただ、富山県を選んで家族で来ており、大変前向きなため、日本語がわからなくてもすべての授業に出ています。何とか富山県で生きていきたいという気持ちを持っており、ぜひそういう力を身に付けさせたいと思っています。

外国籍の生徒の中には、高校へ行きたいと思う生徒もいれば、生活習慣が身に付いていない、学校に来ることもできない生徒もおり、様々です。しかし、高校に行きたいと思う外国籍の生徒にとっては、その機会を保障してほしいというのが切実な願いです。県立高校でも、私立高校でも構わないので、その子どもたちが進学できる仕組みをぜひ県で作っていただけるとありがたいと感じています。

(委員)

委員の方のこれまでのご意見をなるほどと思いながら聞いていました。外国人労働者の方が家族とともに本県に来て、本県で生活をされます。当然その中には子どもたちがいるので、その子どもたちの教育となると、県全体的なレベルの話になるのだらうと思います。

教育環境ということを考えると、学校として十分な準備ができていなければ、入学する生徒にとってもプラスには働かないだらうと思います。特別な教育課程の編成や人員の確保、その他いろいろなバックアップをする支援体制の整備が十分でない限りは、そうした教育を施すことがなかなか難しいのではないかと思います。特に人材については、教員や外部人材といった人材を十分に確保できなければ、入学した生徒に十分な指導を行うことができないということが非常に大きな課題になると思っています。そうした面をどうするのかについては、いろいろと協議をして検討していかねばならないと思います。

(委員)

中高一貫教育校に関しては、ある私立中高一貫教育校を作ろうとした際、人口減少が見

込まれるという理由でなかなか認可が下りなかったということは聞いています。

外国籍生徒に関しては、私は、特別枠が必要ではないかと思います。外国にルーツを持つ生徒は、近年、大変多くなっています。中学校側から、県立高校に行く学力がなく日本語がなかなか習得されておらず困っているということで、私立高校が受入れを頼まれるケースが実態としてあります。多くが日本で働くために、外国から来た方々のご子息です。労働者であったり貿易に関わる方であったりして、日本語の習得度もバラバラで、話すことはできるが読み書きができないといった生徒が多いです。

今後、ますます労働者が不足する中、富山県として外国にルーツを持つ生徒をどう育てるのかといったことへの対応が必要だと思います。中学校側から頼まれる私学の受入れには限界があるため、人的な支援や財政的な支援がないのであれば、公立にしっかりと枠を設けるべきだと思います。

労働者不足は大変厳しく、特に高卒の求人はものすごく倍率が高い状況にあります。それを外国籍の方の力で変えることが今後不可欠ではないかと思います。ぜひ、教育委員会と行政でしっかりと議論し、先延ばしせず方向性を出す必要があると思います。

(委員)

中高一貫教育校については、メリットとデメリットがあると思います。今のところ富山県には設置されておらず、他県では多く設置されている事例があります。この検討会議は高校の話なので、高校の視点に立つこともありますが、中学校や小学校の先生方、または保護者の方のご意見も伺い、富山県ならではのコンセプトのようなものを作った上で設置するのであれば、独自性のある魅力が詰まった中高一貫教育校を作ることを検討することがいいのではないかと思います。

外国人生徒特別枠については、いろいろなご意見がありますが、実際に外国人のお子さんが増えているという現状を踏まえると、必要だという声が多いのは理解できます。その一方、受け入れ後の教育がしっかりできる裏付けがない状態で受け入れるのは、不幸な結果を招きかねないこととなります。受け入れることになる場合は、入学後の適切な支援はもちろんのこと、例えば、授業をしっかりと受けられるレベルの日本語を習得できるように小学校、中学校の頃からのシステムティックな支援を行っていくことが大事だろうと思います。

その上で、高校に行った後、さらに進学したいという方もいらっしゃるでしょうし、そのまま働きたいという方もいらっしゃると思うので、生徒のニーズを聞きながら、増えていく外国人の方々に対してしっかりとした支援をしていくことが重要だと思います。

現在は、先ほどのご意見にもありましたが、人的ソースが全く足りない状態だと思うので、そちらの整備を県にお願いするのが先かだと思います。その上で、しっかりと準備をして外国人の方々を受け入れ、教育するという方針がいいのではないかと感じています。

(委員)

一つは学科構成の見直しについてです。こちらについては、デジタル化の進展と社会の変化により、高校教育にデータサイエンスを取り入れる重要性が増しています。このスキルは、現代社会の理解と未来の形成に不可欠です。文系、理系にかかわらず応用されるデ

ータサイエンスは、生徒たちの分析力や問題解決能力を育成します。例えば、歴史データの分析やGIS、地理情報システムになりますが、GISを用いた地理学など、文系科目との統合授業の他、Python（パイソン）など基本的なプログラミング教育や、実際のデータを用いたグループプロジェクトなどを取り入れることにより、データの理解と活用能力を身に付け、将来的に社会の様々な分野で貢献できることが期待されます。

このような教育は、生徒たちにとって、未来社会での活躍の基礎を築く上で重要であると同時に、新しい技術を学ぶことで思考法や多角的な視点も養われるものと思います。未来の社会で活躍する人材を育成するために必要なステップだと考えています。

次に、様々なタイプの学校・学科等についてです。バングラデシュ出身の方の子どもが高校の編入先を探す際、大変苦勞した例があります。最終的には、石川県の私立高校に編入できたのですが、私立だったためか、入学当初は体育や美術など一部の授業を除き、他の生徒とは別に日本語の授業を集中して受け、日本語能力検定試験3級の取得まで、他の生徒とは異なる時間割が組まれていたとのこと。彼が高校を卒業する頃には、日本語能力検定2級を取得。翌年には、日本語能力検定1級を取得し、無事に志望大学に合格できたということがあります。

全国的に調査すると、母語支援員などの制度がある学校もありますが、私は日本語の授業に参加することで、外国人生徒も徐々についていけるようになると考えています。逆に母語での支援をしすぎると、日本語能力の向上は期待できません。日本人が海外に行った場合、その国の言語を話さなければ孤立することもあります。特別な対応を過度に行う必要はなく、丁寧ながらも効果的な方法での支援が望ましいと思います。

(会長)

全体を通じてご意見がありましたら、お願いします。

(委員)

教育大綱の基本理念に「地域社会や全国、世界で活躍し、未来を切り拓く人材を育成」「真の人間力」ということが謳われています。また、令和の魅力ある活力ある県立学校づくりに向けた6つの方向性の一つに、「グローバルに活躍する生徒の育成」が挙げられています。

前回の検討会議で、国際バカロレアについて協議した際、「時期尚早」または「費用対効果」というネガティブな意見が多かったと思います。県内の公立高校の何校かでは留学の機会はあると思いますが、真にグローバルに活躍する生徒を育てようとするのであれば、他府県と比べて、そういったグローバルな機会に触れることが先んじていなければならないと思います。

また、留学のチャンスばかりではなくても、外国の留学生を受け入れるという考え方もあると思います。具体的にそういう学校があれば、子どもたちは「あの学校に行けば留学ができる」「国際キャンプがあって、ハーバードの学生と過ごせる」といった国際的な視点を持つことができるので、小、中、高校を含めて、どこかの段階で富山県は先んじているという学科なり取組みなりを期待したいと思います。

(委員)

自民党県議の方から「地域との共存」についての強い要望があるとのことですが、私は、バーチャルでの授業が非常に有効な手段になるのではなからずと思います。現在、企業ではバーチャルでの会議が数多く実施されており、大学においてもバーチャルで情報連携している実態があります。バーチャルと言うと、Web会議というイメージもあれば、等身大の画面に、先生が本当にその場にいるような臨場感溢れる授業といったものもあります。資料などがどんどん共有化され、眠っている子がいなくなるくらいレベルの高い授業が可能になっています。

おそらく統廃合によって懸念されることは、ここにある学校がなくなるのではないかと考えたことだと思うのですが、校名は変わったとしても学校は残し、その学校でバーチャルな授業を受けることができれば、統廃合により通学時間が変わるといってもなくなると思います。また、場所は遠いが特徴のある学科に行きたい場合、その授業を選択し、その学科に入学したことにできるといったことが県西部と東部で可能となるのではないかと考えます。

こういったことが技術の進歩によって可能となってきたので、それを積極的に取り入れることができれば、統廃合という概念をネガティブなイメージからもっとポジティブなものにできるのではないかと考えます。また、より積極的にその議論を進めることが可能にもなるのではないかと考えますので、ぜひこの技術について、現在どこまでできるのかということを確認した上で、進めていければいいと考えました。

(会長)

私も今朝からオンライン会議をやってきましたが、そういった視点もコロナ禍を経て産業界では当たり前になっているので、ぜひ学校教育でも検討いただければと思います。

また外国籍生徒の問題は、これからの人手不足や労働力不足につながり、それによって企業の業績が左右される状況になっているので、経済界が危機を感じている課題の一つだと思っています。

それでは、アドバイザーの先生方からご意見を賜りたいと思います。よろしくお願いたします。

(アドバイザー)

本日の大雪によって、県内の高校がどういう状況なのだろうと思ひ、ホームページを調べてみましたが、私の調べた範囲では、リモート授業になっている高校は一つもありませんでした。ここに県立高校の教育問題の本質があるのではないかと考えました。

また、副産物としてですが、公立高校と私立高校のホームページのトップページを見ると、公立高校のほとんどが校舎の写真であるのに対し、私立高校は生徒の顔が出ていました。「生徒を主語にした」と国の中教審では言っており、本日も皆さんからそれに近いお話がありましたが、「生徒を中心に」ということと校舎の写真がトップページに出てくるところに距離感を感じました。

3番目の議題についてですが、全国募集や魅力化については他県でも取り組まれているので、やれることはやるということに加え、富山県でどれだけ実現可能かはわかりません

が、全寮制について考えてもいいのではないかと思います。通学手段を提供、保障するということを県立高校に特に求められているとするならば、有力な選択肢ではと思いました。

また、市町村に対しての認識が中高一貫教育校と高校再編で違うということも新鮮な驚きでした。中高一貫教育校に関しては、ある意味、市町村が拒否権を持つ立場のような形になっていますが、高校再編では、ステークホルダーであるはずの市町村があまり出てきておらず、県の判断で進めるような議論が展開されているようで、この差異はどうしてあるのかが少し気になりました。

2番目の議題である学科・コース等については、普通科改革が国で例示されていますが、二つのタイプの例示にこだわらないでほしいということの中教審でも言っているところです。あまり引っ張られすぎないでよいと思いますし、本日の資料を見ると引っ張られていないので、富山県ならではの議論が展開されているのではないかと理解しました。

また、開建高校の例が出ていましたが、80人を3人の先生で見るということで、この検討会議では1学級40人を前提とした議論がずっと続いています。現行のルールは人為的に決まっているだけなので、1学級を40人とする学級数を統廃合の基準とし続けていいのかということについては、少し認識した方がいいのではと思いました。

1番目の議題である統廃合に向けた基準について、教育委員会の会議体が教育政策の決定主体としては正統性が一番高いので、教育委員会会議で単に追認しないように、どのように議論されるのかということがこれから大事になってくるのではと思います。

基準の全体化をしないことや、機械的な当てはめをしないこと、ステークホルダーと丁寧に対話をするということについては、冒頭、教育長からのお話であったので、そのように進むのだろうと理解しました。

統廃合する、しないは別として、基本的にこの会議体では供給側の議論が多いと思います。それでいいとは思いますが、そうであるならば少し欠けている議論や論点があり、例えば校長の任期が2年、3年で、すぐ変わるのがいいのかという問題や、勤めている先生方が頻繁に異動するのがいいのかといったこともあるのではと思います。

また、教員のモチベーション、例えば部活動を頑張りたいという先生が、統廃合によって部活動から遠ざかるなどといったことがないように、供給側のコアである先生方を念頭に置きながら、議論を深めていくのがよいと思いました。

最後に、どういう箱ものを作るにしても、理想論や教育内容に関わらず、お金やリソースが必要なため、それをどこから調達するのかという議論は必要だろうと思います。

(アドバイザー)

まず、「再編に関する学校規模や基準などの基本的な方針」についてですが、資料2の「県立高校配置の方向性」については、「学びたい、学んでよかったと思える高校づくりのため、子どもを中心とした視点に立って、実効性のある取組みを進めていくことが必要」ということで、委員の方々皆さんがそれにご賛同なさっているのだと思います。

そして、令和の魅力と活力ある県立高校づくりに向けた6つの方向性が提示され、県立高校配置の方向性の考え方として、「通学時間内にある高校から多様な選択ができるようバランスよく配置し、その実現に向けて再編統合や学科・コースの見直し等について検討する」という形になっていました。ここで方向性として提示されている内容は、大変重要で

あり、この理念の下、県立高校のあり方を考えていく必要性があります。5月に出された報告書では具体的に6つの方向性と具体策が、本日の会議ではICTなどについて皆さんからご発言が出されていましたが、そこは本当に大事だと思います。

総論からさらに一步踏み込んで、各論としてこれからのあり方を考えていく上では、「魅力」という言葉がよく使われていますが、取ってつけたような「魅力」ではなく、その学校がどういった地域に存在していて、どういったリソースを活用できるのかという学校の強みを考える必要があると思います。「子どもを中心とした視点に立って学校づくりをする」と言っているので、生徒や保護者、地域が何を望んでいるのかということをお我々が推測するのではなく、実際にそうしたニーズを把握して、地域や学校、大学、企業との連携や、高校同士や中高間の連携といった学校間連携、先ほども出ていた遠隔教育という方法もあるかと思うので、そういったことを考えていかなければならないと思います。

実際、シビアな問題として、学校が存続するという事は地域の存続にダイレクトに結びつく場合もあるので、単に人数が少ないということで小規模校を切ってしまうのではなく、分校化やサテライト校など様々な言い方がありますが、残す選択を考えることも必要かもしれません。

また、本日の三つ目の議題の中にもあった中高一貫教育校のように様々なことを議論していくことが非常に大事で、場合によっては、統廃合がマイナスのイメージではなく、ある意味プラスのものを作り出していくこともあるのではないかと思います。再編に関する規模や基準と学科やコースの見直しについて具体的に議論することが大事で、総合的な観点から高校配置について検討することが重要です。前回の議事録等を踏まえて申し上げると、「1学年4学級未満または160人未満の学校規模については、再編統合の検討の対象とする」と書かれていますが、こうした再編統合基準を弾力的に運用していくことが大事だと思います。適正規模を下回る場合、即座に再編統合の検討対象とするのではなく、まずそれぞれの学校を活性化させることが一番重要です。

県立高校の学科やコースの見直しについて、本日は普通系学科、商業科、家庭科、前回の会議では、農業科、工業科ということで資料が提示されていましたが、各学科についての配置状況や志願状況、欠員状況、進路状況、関係校長からの意見についての内容となっています。3回目の会議の際に学科・コースの見直しに関する検討の視点として、各学科の教育活動は、生徒や保護者、産業界のニーズに合っているか、普通科の魅力化、特色化をさらに進めるための学科やコースの設置をどうするかということが提示されており、非常に大事なことだと思います。こうした検討の視点や、学びたい、学んでよかったと思える学校づくりができているか、子どもを中心とした視点に立って、実効性のある取組みが進められているかということについては、皆さん総論賛成なのですが、本当にこれができているか、しようとしているかということをお判断するためには、現在、提示されているデータでは少し足りないため、補足する必要があるのではないかと思います。学校では、自己評価と学校関係者評価を実施しており、そのデータがあるはずですが、富山県ではスクール・ポリシーを策定済みですが、策定後はスクール・ポリシーに基づく重点目標やその達成に向けた評価項目等の評価が行われているはずで、今回提示されているものに加えてそうしたデータも必要で、多面的なデータに基づく総合的な分析が不可欠だと思います。

学科やコース等について具体的に細かいデータを見ると、普通科、探究科学科、総合学

科で希望者数が募集定員を上回っており、職業系専門学科においては関連就職率や関連進学率がいずれも低い学科が存在しているので、その原因について産業社会の変化や産業界が求める人材の動向を踏まえて、分析する必要があると思います。

様々なタイプの学校、学科について、今回は中高一貫教育校と外国人生徒に係る特別定員枠が議題とされています。中高一貫教育校は、6年間の学校生活の中で計画的、継続的な教育課程を展開することによって、生徒の個性や創造性を伸ばすことを目的とするものですが、あくまでも選択的導入ということになっています。ただし、魅力と活力ある学校づくりの一つの選択肢にはなると思います。今回、事務局からご報告いただいているのは、比較的進学実績のある伝統校を併設型の中高一貫教育校にするという例でしたが、他にも連携型の中高一貫教育校もあるので、富山県の自治体によっては、連携型を模索していくという方向性もあるのではないかと思います。

最後に、外国人生徒に係る特別定員枠ですが、実際に日本語指導が必要な高校生は、この10年間で2.7倍に増えています。そうした生徒たちが学校に入ったとしても、中退率が非常に高く、卒業後の進学率が低く、そして非正規に就職する率が高いということで、国全体でも大きな問題になっています。特別定員枠も大事ですが、私は、義務教育段階を含めて日本語指導体制の整備の方を優先的に行うべきではないかと感じました。

(会長)

最後に、教育長から一言ご挨拶をいただきます。よろしくお願いします。

6 教育長挨拶

(教育長)

今日は、長時間にわたり、たくさんのご意見を頂戴し誠にありがとうございました。

今日は3点についてご議論いただきましたが、1点目の高校配置の方向性ということについては、新たにビジョン的なものを3点お示ししましたが、概ね「こうした方向でよいのではないか」というご意見をいただき、ありがたく思っています。ただ、その内容については、もっと追求していくべきということはその通りだと思っています。

また、「学校の規模的なものや選択肢を広げていくこと、バランスよく配置すること、それを一体的に進めていく必要があり、規模について記載があるが、規模ありきで進めていくものではないだろう」というご指摘はその通りだと思っています。「あくまでも子ども真ん中ということで、幅の広い、数字だけの基準ではない考え方で検討を進めていくべき」というのはその通りだと思っています。

学科・コースについても、例えばデータサイエンスやグローバルなどについてお示したものに対し、こうした方向が必要だろうというご意見をいただいたと思っています。普通科コースのあり方などについても、いろいろなご意見をいただきましたが、教育的な効果をどこまでうまく発現できるかということを考えていくべきだろうと思っています。

また、学科・コースの魅力について、現在取り組んでいる活動などをもっと発信することにも工夫していきたいと思っています。2月に探究フォーラムという、いくつかの学校がまとまって活動を発表するような行事も企画をしていますが、そういったことも含め、発信していきたいと思っています。

「探究的活動を深めると教員の専門性が求められて大変だ」というご発言もありました。教員の力もそうですが、大学や企業など外部の専門家の協力を受けやすい体制づくりも含めて考えていきたいと思っています。

また、「コロナ禍で身に付けたデジタル技術の活用ということをもっと高校再編の中でも考えていくべき」というご意見も、しっかりと受け止め、考えて参りたいと思います。

中高一貫教育校と外国ルーツの生徒への指導については、「幅広い選択肢を確保するという意味では、中高一貫教育校についてはやってみる意義があるのではないか」というご意見をいただきました。また、外国人特別枠については、「いろいろな人材の方に富山で働いていただくために、環境を整備すべき」というご意見をいただきました。また、「現にいるお子さんがここで学びたいというニーズに対応するためにそういう体制が必要だろう」というご意見もいただきました。「日本語指導体制や受検枠だけではなく、その仕組みも大切」というご意見もしっかりと受け止めて、考えていきたいと思っています。

その他、たくさんご意見をいただきましたが、次回の第5回会議では、今回の議論やアドバイザーの先生からのご指摘、これまでの議論、県民の皆さんからのご意見を伺った結果なども踏まえ、学科・コースなども含めた上で、基本的な方針案としてお示しし、ご意見をいただけるように準備を進めて参りたいと思っています。

今年度中には、最終的な基本的な方針という形で取りまとめ、来年度以降の総合教育会議での議論につなげていきたいと考えていますので、どうか委員の皆様には、今後ともご支援、ご協力を賜りますよう、よろしく願いいたします。

議事が終了したので、会長が終了を宣し、進行を事務局へ戻した。

7 閉会

16時35分、司会が閉会を宣した。